

1. 研究領域名：資源の分配と共有に関する人類学的統合領域の構築 - 象徴系と生態系の連関をとおして -

2. 研究期間：平成14年度～平成18年度

3. 領域代表者：内堀 基光（東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・教授）

#### 4. 領域代表者からの報告

##### (1) 研究領域の目的及び意義

本領域研究は、「資源人類学」の略称を用いていることで特徴づけられるように、「資源」の分配と共有のあり方を研究軸として立てることにより、人類社会が拠って立つ象徴系（文化）と生態系（自然）という二つの基盤を連関的に捉えること、そして、この連関の様相を実証的かつ理論的に解明する人類学の新たな統合領域を構築することを設定目的としている。

自然生態系に直接由来する天然資源のみならず、人間の作り出す二次的物的資源、さらには無形の知的・文化的資源をも含む広義の「資源」の分配と共有のあり方をもって、人類社会の根底的な構成と見るという視座を確立することを目指すものである。

総括班および計画研究班によって探究される資源のカテゴリーは、文化、知識、小生産物、貨幣、自然物、生態系、生態空間、および人間身体である。主として、アジア、アフリカおよびオセアニア地域の周辺諸社会を主たる研究対象として、実証的な面で人類学の蓄積を活用する。理論面においては、現代世界において周辺とされてきた諸社会における「資源」のあり方を根本的に討究することによって、文化と生態を架橋する人類学に新たな可能性を拓く。

これをとおして人間の生活の基礎要件と生活に内在する価値の意味を探り、そこからの逆照射として西洋近代以降優位に立つ機械技術的資源観の意義を再検討する。今日における地球的課題ともいべき資源問題はであるが、本領域の構築によって、この問題のはらむ人間的次元の基礎付けを行う。

##### (2) 研究の進展状況及び成果の概要

本領域全体としての成果は『資源人類学』（全9巻）として学術書籍の形態で2007年11月に公刊される。また2007年より4年間、同名の放送大学における講義群によって、広く学生・一般社会に向けてその一部の成果が公表されている。総括班および8班からなる個別計画研究は、種々の研究会、ワークショップ、シンポジウムを開催し、わが国における文化人類学と生態系人類学の学的交流を推進し、「資源」の主題のもとに統合された領域を構築しえた。これをとおして「資源」が人類学にとってのみならず、人文科学一般においても広大な学問領域を構成しうることを示した。研究期間中の中間的論考、開催されたワークショップ、シンポジウム等の報告書として、書籍体（冊子体）のかたちで、以下のものを発行した。

総括班（代表：内堀基光）（編）『資源人類学中間成果論集』 pp.379 2004.08 ISBN:4-87297-880-3

Matsui, Takeshi & Saroj Aungusmalin (eds.), Multiply Useful Plants: Uses and Usefulness. 188pp. 2005.03

Sugawara, Kazuyoshi (ed.), Construction and Distribution of Body Resources: Correlations between Ecological, Symbolic and Medical Systems. 243pp. 2005.03

Daniels, Christian (ed.), Remaking Traditional Knowledge: Knowledge as a Resource, 193pp. 2006.02

Deguchi, Akira (ed.), Circulation of Human Body Parts: Local, National and Beyond. 88pp. 2007.01

小長谷有紀、辛島博善、印東道子（編）『モンゴル国における土地資源と遊牧民』 156pp. 2005.03

佐々木史郎（編）『北東アジアにおける森林資源の商業的利用と先住民族』 235pp. 2006.10

小川了、周永河（編）『グローバル化する世界の中の小生産物』 179pp. 2006.06

資源人類学・秋道班研究会報告書『コモンズと生態史研究会報告書』 183pp. 2005.11 総合地球環境学研究所発行

松井班『研究彙報』 第1号（2003.02）～第16号（2006.12）合冊 2006.03 東京大学東洋文化研究所

#### 5. 審査部会における所見

B（期待したほどではなかったが一応の進展があった）

「資源」という語を媒介にして、論文・著書等の成果は上がっており、個別の研究については一応の進展があったように見える。また今後、9巻の論文集が出版予定であり、その内容も多様な論点に触れており期待できる。

しかしながら、これらの研究は「資源人類学」という領域自体を創設・展開するというよりも、従来のアプローチに沿ってまとめられた感がある。また、個々の研究を統合した特定領域研究としての成果が明確になっておらず、当初の目的が達成されたとは言いがたい。特に、象徴系と生態系が協働することで新たに明らかになった知見の全体的整理ができておらず、本研究によって初めて得られた学術的知見が不明確であることが問題である。